

ALTの目から見た日本の英語教師とJETプログラム

日 野 克 美

はじめに

日本全国の実教育現場に若い外国人教員が姿を見せるようになって久しい。イギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどの英語圏から続々と日本へやってきて各市町村の勤務地で英語の補助教員として仕事をしている。1999年度は5835人に上っている。1987年からの総計では2万人に達している。これほどの数の外国人が地方の学校にまで進出したことは日本の歴史始まって以来の事件であろう。筆者はイギリスに2年間滞在している折にケンブリッジ大学にて講演をする機会があった。聴衆の中に日本で補助教員として仕事をした経験のある若者が多数来ていた。講演の後、その若者たちと話しをする機会があったので日本での経験についての感想を尋ねてみた。最も目立ったのは「何校も巡り歩くのは本当に疲労感だけが残った」というものだった。次に多かったのは「まるで録音テープ代わりに使われたのは残念だった」という感想である。最後に「JETプログラムは基本的にすばらしい企画であると思うけれど、その後のフォローが皆無である点が惜しいと思います。いったいこの企画は将来何をを目指しているのでしょうか」という感想が印象的だった。

昨年たまたま茨城県に補助教員として勤務しているイギリス女性と知り合う機会があった。彼女の日本体験とイギリスで私に

自分の経験を話してくれた若者たちの感想とを比較してみたいと思った。緻密な資料収集や組織的観察を行ったわけではないが、これまでの外国人補助教員たちとの出会いを振り返って、日本の英語教員とJETプログラムの妥当性について考察してみたい。

1) MEFからAET変じてALTの歴史

JETプログラムについてはインターネットのサイトで以下のような紹介がある。

JETプログラムは、「語学指導等を行う外国青年招致事業」Japan Exchange and Teaching Programmeの略称で、地方公共団体が自治省、文部省、外務省及び財団法人自治体国際化協会Council of Local Authorities for International Relations(CLAIR)の協力の下に実施している。

このプログラムは、外国語教育の充実と地域レベルの国際交流の進展を図ることを通じて、わが国と諸外国との相互理解の増進とわが国の地域の国際化の推進に資するため、昭和62年に開始された。平成8年度で、開始以来10年目を迎え、招致国は4カ国から25カ国に、外国青年も848人から約5,300人へと事業は大きく展開している。

外国青年は、次の3つの職種に分か

1 McConnell, D, L. 2000, *Importing Diversity: Inside Japan's Jet Program*, University of California Press

れ、それぞれの職務に従事している。

1) 国際交流員 (Co-Ordinator for International Relations)、外国語指導助手 (Assistant Language Teacher)、とスポーツ国際交流員 (Sports Exchange Advisor)。

www.clair.nippon-net.ne.jp/HTML_E/JET.HTM

この紹介の通り1987年文部省はJETプログラムという外国人英語指導助手を招く大々的な計画を発足させた。そのプログラムが発足するきっかけとなった先駆けのプログラムは実は日本側ではなく、イギリス側が先に提案したものであった。1985年、イギリスが日本側にもちかけたのが最初である。日本側の反応は鈍く、どの県でも腰が重かったという¹。文部省が積極的に声をかけた結果、応じたのは兵庫県であった。こうして1986年兵庫県に14名の優秀な若手の英語教員がイギリスからやってきた。この14人が1年間勤務した結果、評判が極めて高く、近隣の県でも招聘したいという声があがった。そこで文部省は正式に1987年よりJETプログラムとして立ち上げ全国の県に対して外国人補助教員を受け入れるよう要請した。発足当初、外国人補助教員をMEF (Monbusho English Fellow) と称したが、まもなくAET (Assistant English Teacher) と改称した。このAETという呼称が人口に膾炙して外国人補助教員という長い名称よりは日本人教員の間に定着し始めた。こうして各県のスピーチコンテストではAETの姿がよく見かけられるようになった。やがて英語だけではなくフランス語やドイツ語の補助教員も追加するようになり、ALT (Assistant Language Teacher) と改称せざるを得なくなった。しかし、今なおAETという名称が頻繁に聞かれる。

2) 英語教育現場にとって黒船到来

ALTの到来は長年の太平を享受してきた英語教員にとってまさに黒船到来であった。受験英語の授業すなわち「読んで訳す」式の授業で生活してきた英語教員にとって話したり聞いたりする英語を教えることは世間でどう騒がれようと必要ではなかった。それは生徒自身が支持し、父兄が支持し、そして自分自身がそれしか方法はないと紆余曲折を経て到達した結論であったといっても過言ではない。もちろん、様々な教授法が流行しその度に英語教育界は右往左往の様相を呈した。オーラルメソッドが流行すれば、その研究会が全国各地で開催された。Graded Direct Method, Silent Way, Pattern Practice, 等々数え切れない教授法が英米の学会から到来し英語教育界を席卷した。しかし、そうした波が去った後で根強く残ったのが伝統的訳読式であった。なぜ伝統式訳読が残ったのか。それは受験という重石が存在したからであるという説が有力である。結局、受験に役に立たないものは淘汰されていった。どれほど会話に力を入れても大学受験で出題されないのであれば、受験生は会話をおざなりにしてしまう。会話を重視した面白い授業をして評判のいい先生もやがて「受験に役立つ授業をしてください」と父兄から注文を受ける。生徒からも同様の苦情を受ける。こうしてすべて受験一色の授業スタイルへと淘汰されていったのが実情であろう。

ところがこうした状況へ青天の霹靂のごとく文部省がJETプログラムを立ち上げた。これはまさに英語教育現場にとって「黒船事件」であった。否応なく公立の中学・高等学校は外国人英語補助教員を受け入れざるを得なくなった。受け皿の方の体勢が整っていない内に新しい事態が展開し始めた。受け入れ校側は取り合えず外国人教員と日本人教員がチームを組んで教えるTT (Team Teaching) を開始した。しかしこのTT方式は、日本人同士でもチームで

授業をするのが稀である土壌へ始めたのであるから、ギクシャクした状態で始まったといってよい。中学高等学校段階でもそれぞれの教員は自分の担当するクラスには授業王国とでもいうべき聖域としての感覚を抱いていることが多い。従って研究授業を依頼された場合は一大決心をして公開するのである。失敗してはいけないという悲壮感から研究授業までに綿密な準備を行い中にはリハーサルまで行う教員もいる。その事情は、後に登場するALTの「Demonstration Class公開授業」に詳述される通りである。

3) 混乱と対応

各学校の現場はまさに期待と混乱とが交差する状況となった。若い世代は期待をもって迎える場合が目立ったが、40代、50代以降の教員は概して戸惑いを覚える向きが多かった。さらに進学校として著名な学校と進学校ではない学校でも受け入れ態勢に顕著な違いが生じていた。

実業高校や進学率の低い学校ではむしろ積極的に受け入れるケースが目立ったが有名大学へ送りこむような進学校では外国人補助教員の存在は有難迷惑であった。福井県のある進学校の場合、外国人補助教員を受け入れることにはなったがそれは文部省に対する建前であった。着任する外国人補助教員を迎えに行った英語科主任は駅から学校までの道中、外国人教員がいかに必要なとされていないかを諄々と説明したので学校に到着するまでにその新任教員は仕事への情熱をすっかり失ってしまったというケースがある。

茨城県の教員研修の場でTT授業について非公式な話を聞く機会があった。ある公立高校の教員が、外国人補助教員から電話があり風邪で休むということだった。そ

の電話を受けた後、英語科全員で万歳を三唱したとのことだった。「TT授業をしなくてはならないと思う度に気が重くなるよ」と一人がもらすと「まったく同感だ」と多くの教員が応じた。

こうした混乱の状況も確かであるが、一方生徒の側からはスピーチコンテストに出場する際に外国人教員が懇切な指導してくれるので大いに助かっているという声も多く耳にするようになった。確かに各県のスピーチコンテストの会場には外国人教員に付き添われた生徒が目立ってきている。スピーチ原稿の校正や発音の矯正を付きっきりで指導してくれる外国人の存在は大きい。毎年スピーチコンテストのレベルは上昇しているとの感想を耳にする。こうした1対1の指導では大いに効果を上げているJETプログラムであるが、本来のクラスでの活用となると、事態は好転していない様子である。その理由の一つが、悪平等とも言えるべき方針のせいであると考えられる。それは外国人補助教員が一人で1週間に6校から8校も巡る方式である。毎日違う学校へ行っても挨拶程度の英語しか教えることのない状況では、生徒との関係も希薄なまままで終わる。それではフラストレーションがたまっていくのは当然であろう。こうした悪弊はJETプログラム発足当初から指摘されてきたことであるが、依然として改善されていない。それはまさに平等を重んじる風土のなせる技としか思えない。外国人教員がある地域に派遣された場合、その地域の公立中学・高校で平等にその恩恵に浴さなければならないという空気がある。そこで一人の外国人補助教員が6校も7校も巡る羽目になる。そこには相手の立場に立って考えるという視点が抜けている。毎日違う生徒の前に立って機械のように単純なことをやらされる身になれば果たして充実した経験になるであろうか。使う側の都合や論理で動いている限り、ALTの不満は

募る一方である。すべてのALTが不満を抱えているわけではない。十分に満足して仕事をしているALTも少なからず存在する。個々の人間関係も大きな要因であろうが、満足しているALTの多くが1校を中心としてせいぜい2校か3校を巡る程度で教えている場合である。そこでは豊かな人間関係も育ちやすい。生徒との交流も密接になる。こうして制度的要素が成功失敗の分かれ目になっている場合がある。ちなみに1校を基盤にしているケースをBase School、多くの学校を駆け巡るケースをOne shot visitと称している。One Shot Visitは受け入れ校にもALTにも好ましくない方式であることは歴然としている。

4) 現場での状況 1 ALTの目から見た日本の英語教師

ALTの目から日本の英語教師はどのように映るのであろうか。昨年、イギリスのケンブリッジ大学を卒業したばかりの女性が茨城県の公立高校にALTとして赴任した。彼女の目に日本人の英語教師がどのように映ったのであろうか。彼女からファックスが届いて「自分の体験記を書いたのを見て欲しいと」とあった。その記録の中で先ず取り上げたい事項として研究授業がある。新年明けにイギリスでの休暇から戻った彼女が突然「研究授業をすることになっている」と告げられ戸惑うところから、日記風に記述してある（付録を参照）。彼女の日記風記録から様々な問題点が浮かび上がってくる。その中から4点取り上げてみたい。

1) コミュニケーションの不足

まず、突然に「研究授業をすることになっている」と彼女の合意なしに既に決められている事柄として告げられることが考慮すべき点であろう。これは明らかにコミュニケーションの不足として考えなければなら

ない点である。事前に提案し、議論をし納得がいくようにすることが肝要であろう。せっかく異文化を背負った存在が身近にありながら、異文化接触のメリットを生かしてない

2) 見せる授業か普段の授業か

これは研究授業についての考え方の姿勢である。日本人教師にとって研究授業とは「見せるための晴れの舞台」としてとらえる。イギリス人の彼女は「普段の授業を見せる」べきものとする。どちらがいい悪いという価値判断は別として、ここで十分に話し合うことが価値あることだと思うのだが、日本人教師は「厄介なことだ」と感じている様子が見ええる。

3) 教員養成課程と教員の意識

彼女がこの経験を通して問題点として感じたことは、教員養成制度が不十分であることだった。教育学部以外の学部出身者の場合、通常2週間の教育実習で現場に立ってしまう。イギリスの場合1年の実習期間を経て現場に立つのと比べるとあまりに大きな開きがある。次に痛感したことは、日本人教師自身が教授法を改善できると思っていない点である。研究授業自体は生徒の反応もよく成功裏に終わった。彼女はこの経験で日本人教師自身が教え方を変えてゆくきっかけになるものと期待したのだったが、まったく変化はおきなかった。それはあまりにも当然のことであろう。一朝一夕で大きな変化を望む方が楽天的過ぎると思う。日本人教師にとって研究授業はいわゆる「お祭り」であって、お祭りが終われば元の日常に帰ってゆくのである。一回の研究授業で教授観が変わると考える方が無理であろう。

4) 教育予算の使い方

彼女は以上の問題点に加えて、教科書中心の指導法の問題やJETプログラムの妥当

性について、興味深い意見を展開している。「ALTに惜しみなく予算を費やすよりは日本人教員の研修に費用を回すほうが有効である」と述べているところは傾聴に値する。しかし、JETプログラムのもともとの発想は貿易の黒字減らしという国際政治がらみであることを知るものにとって複雑な思いに駆られる。

5) 結 論

JETプログラムが始まって13年が過ぎている。そろそろ外国人の受け入れ態勢が整ってもいいころであろうが、現実にはかばかしい進展を見せていない。日本の異文化体験はまだ日が浅いというべきであろうか。

これまで数多くのALTと話す機会があったが、日本人教師の教授観を変えようと努力したケースはなかった。イギリスの大学を卒業したばかりの新鮮な目で眺めて日本の英語教師がどのように映るのか興味を持って6ヶ月間の彼女の経験を見守った。

日本にきてまだ2ヶ月目に会った時の表情は快活で元気があふれていた。6ヶ月目に会ったとき、表情が暗く沈んでいた。始めて出会ったときは、日本滞在を延長して働きたいと言っていたが、6ヶ月目、「契約が切れたらすぐにでも帰国したい」と言う気持ちになっていた。日本の教員との共同作業は空しいとの思いに駆られている様子がありありと感じられた。

彼女の感じた点を集約すると、教員養成制度がこのままでいいのだろうかという点が特記すべきことであろう。イギリスでは1年間に渡って教育実習をする。日本では通常2週間で終わる。また外国語の教員を目指す場合、イギリスでは少なくとも専攻する外国語を使用している国へ1年間行っ

てくる事を必修としている。彼女のレポートには触れていなかったが、英語を駆使できる先生の数が少ないこと痛感していると述べていた。「なぜ自由に英語を使えない教師が先生として仕事ができるのであろうか」と素朴な疑問を抱いている。これは日本の特殊事情であることを歴史的に説明しておいたが、説明しながら自分としても釈然としないままであった。彼女は疲労感をにじませながら、気を取り直して最後に次のように言い残して去っていった。

「もちろんすばらしい教員の方々もいますよ、でも日本の受け入れ態勢がこのままではJETプログラムに費やすお金は無駄遣いだと思います。」

1987年から始まった大規模なJETプログラム、巨額の予算を費やしているJETプログラムを抜本的に変える時期に来ているのではないだろうか。

参考文献

- 若林俊輔 1978 教育実習はこれでいいか
「新英語教育」6月 三友社
- 深沢清治 1994 英語教育界改革への展望
「英語教育」4月 大修館書店
- 沖原勝昭 1991 英語科教員養成
「英語教育」9月 大修館書店
- 藤林富郎 1991 教育実習を考える
「現代英語教育」6月 研究社
- 沖原勝昭 1999 ALTはいらない
「現代英語教育」3月 研究社
- McConnell, D, L. 2000, *Importing Diversity: Inside Japan's Jet Program*, University of California Press

付録

A demonstration class in Japan

February 23rd, 2000

For those of you who have had the privilege of watching demonstration classes this might provide an insight into what actually goes on beforehand, for those who have given them this might bring back memories. Giving a demonstration class certainly provided me with food for thought-both as to how English teaching takes place in Japan and as to how the Japanese system works. Here are a few of these, semi-digested, thoughts...Yoroshiku

On returning jet-lagged, to school after a few days of holidays at home in France I was greeted by the words, "so how about the demonstration class?" Talk about rude awakenings. Demonstration class??? "Surely not" I thought. Unfortunately there was no mistake, the date had been fixed (Valentine's day), invitations had been faxed, all escape routes were blocked and barricaded. About 30 qualified experienced Japanese teachers of English had been invited, with some ALT's thrown in for good measure. It was my chance to embarrass the school, and I could barely contain my excitement.

I have been working as an ALT in Japan for 6 months and have no previous experience of teaching. The learning curve has been (and still is) steep. It seems that whilst navigating the curves and bumps, I have managed to mention (to anyone who cared to listen, or was

unlucky enough to be near me after a bad class) that I thought there were better ways of teaching English than translating the textbook. And now I was being asked to put my money where my mouth was. So I complained (lots) for a few days, and then realised that I only had about 3 weeks before the wonderful event.

1) The preparation

The students chosen were first graders in my base school, a low-level Senior High School. I had been working with them quite a lot, and had been given quite a lot of leeway to actually teach them some English. Negotiations with the JTE began. The demonstration class was to be a reading class (I normally teach them reading, not Oral Communication). This point was not in debate. However most other points were. I was of the opinion that the class should be as similar to our usual class as possible, i.e. textbook based. The JTE suggested a rehearsed game ("But everyone rehearses demonstration classes"). I vetoed that idea thereby increasing stress by a factor of 10. We compromised by agreeing that we could have a pattern of classroom activities, which we could use, without going over the same material twice. We decided to keep a record of activities that had worked in hopes that we could combine them into a fool-proof teaching plan. We chose the lesson that we would have reached by the 14th and started thinking about how to cover the material concerned.

A fortnight later discussions were supposed to have advanced to actual plan-

ning stage. Needless to say that this wasn't quite the case. A badly timed business trip had "rearranged" our schedule: we were two classes short. Luckily disaster was averted by another JTE agreeing to teach the class with me. The week before the actual demonstration the students very inconsiderately came down like flies with influenza, and then were kept away from school by snow. Rehearsals were still being suggested, but with half the students absent, the suggestion didn't have that much weight and was laid to rest, this time permanently.

On the Wednesday before the class, the nitty-gritty detail had to be planned, teaching plans and handouts written, and nerves soothed. (Somehow I don't think I contributed much to the latter.) Before we could begin this we had to have a couple of "English staff meetings" to decide who would sit where and arrange which chairs, and then another meeting to confirm what we had decided at the previous meeting. "It is Japanese way."

So eventually the JTE and I sat down and planned everything. It took us about an hour and a half, nine times longer than our normal team teaching lesson planning time, because we needed to reconcile my crazy gaijin idea that the class should be as ordinary as possible and the fact that it was important that the class be a success (audience oblige). You see, normally, it doesn't matter if the students learn anything or not, because nobody will check, in a low-level school, and the "problem of university

entrance exams", is, well, not exactly difficult to deal with. But of course we had to show our audience that we conduct educational, fun, well-planned classes on a regular basis.

In the end we decided to teach the grammar focus of the textbook lesson (the present perfect progressive, or progressive perfect, or some other arrangement of those three words), by way of a worksheet, followed by some reading and comprehension questions, with a few (educational) games thrown in for entertainment value. So we wrote a detailed plan, found two bored JTE's to act as guinea pigs, and threw our ideas at them. The response was "It's better than I expected." Hmm, praise indeed. Supportive caring colleagues, what would we have done without them...

So we typed and copied the handouts, and went home for the weekend. And, after a Sunday spent agonising over hairstyles and clothes, it was Monday.

2) The class

The class itself went smoothly. The students enjoyed it and learnt something (believe me, I have tested them on it since then) and nobody in the audience threw eggs. The highlight came when one of the students produced the sentence, "I want you to come here." I think he wanted to check what kind of perfume I wore. Or something like that.

3) Outstanding problem

When I was told that I would be giving a demonstration class my initial reaction (after moaning) was that it would

give me a chance to persuade some of my teachers that they could change their teaching methods. However, I doubt that it had this effect.

After the demonstration class there was a discussion group, in which, ALT's expressed several opinions, and JTE's mainly concurred. The aim of the demonstration class was to prove to JTE's that it is possible to teach English, even grammar, in English, without long monologues in Japanese, and without the need for hours of planning, or elaborate preparation. If you try really hard you can even elicit sentences from the students without twenty minutes of giggling and dictionary consultation. Most of JTE's seemed to agree that this approach worked and was preferable to traditional teaching methods. Some even went so far as say that they would be comfortable using these teaching methods on their own. Yet I know from personal experience that the likelihood of this actually happening is minimal. Why? And after the two most common responses "JTE's are very busy with homerooms and clubs", and, "JTE'S are not confident about speaking English" have been dismissed for what they are, namely poor excuses. I reluctantly reach the conclusion that there are two underlying problems :

- 1) Lack of teacher training. Teaching a foreign language is difficult and complicated, and in order to do it effectively proper training is essential. The training currently provided by Monbusho (four weeks plus approximately thirty days of teacher training meet-

ings in the course of the first year of teaching²) is woefully inadequate. Newly "qualified" teachers have little experience of the classroom, which is understandable. However they have not been given adequate training as to how to handle discipline problems, how to plan lessons, how to make tests, let alone any of the aspects of teacher training that are specific to foreign language teaching (e.g. teaching grammar, reading, writing, speaking skills, use of different materials etc.) So even those who wish to teach in a more interesting and effective manner are at a loss as to how to do so.

- 2) Lack of desire on the part of the JTE's to change their teaching methods. Most JTE's I have spoken with do not consider that they can improve their teaching. Most of them do not see this as a major issue. And those who do want to improve their teaching are not sure how to proceed. The most common situation for this kind of teacher is that they will use the ALT classes to have "fun" classes, and then go back to the textbook. Since the vast majority of classes in senior high schools are taught by JTE's without ALT's, of course the JTE's decide what happens. Ultimately it is easier and less time consuming to teach the textbook, via translation. It is also incredibly ineffective.

I therefore respectfully submit (yes I did study law) that if Monbusho wants to improve the English speaking ability of

Japanese students, instead of investing vast sums of money into subsidising apartments for ALT's(gasp!) it considers giving the teachers it already has some training worthy of that name. And I'll be expecting a one way ticket home to appear on my desk any day soon.

ALT in Ibaraki Prefecture

注 : JTE(Japanese Teacher of English)日
本人英語教員

2 Compare this with two years of training in Germany and one year in the UK

ABSTRACT

The summary of English teaching from an ALT's perspective and JET Program

Katsumi HINO

This short essay seeks to describe teachers of English in Japan from an ALT's (assistant language teacher) perspective, thus exploring how the JET (Japan Exchange Teachers) program has affected English teaching in Japan; whether foreign young teachers' presence has been appreciated by each school or whether Japanese teachers were not ready to accept those teachers from other countries. The JET program which has been integrated into Japanese education system since 1987 has invited thousands of young native English speakers as an ALT to each prefecture throughout Japan. In this essay the historical background of the JET program is briefly described.

Due to time limitation, this short essay cannot afford a complete and exhaustive argument of what the JET program has brought about to English teaching in Japan. Instead, it is trying to highlight some Japanese cultural feature through the perspective of a young British female teacher trying to change her Japanese colleague teacher's way of teaching.

A young Cambridge University graduate who came to Japan in 1999 struggled for a year in Ibaraki prefecture to change conservative way of teaching, that is, the translation method which has been dominantly employed in almost all Japanese senior high schools. Taking up an unusual incident, demonstration lesson (*kenkyuu jugyuu*), she tried to persuade her Japanese colleague to change their way of teaching. Until the demonstration lesson day, she negotiated with her colleague over the way they were to present their teaching

A controversy between them indicates a significant difference concerning a demonstration lesson. She asserted that the demonstration lesson should not be different from daily lessons, while her Japanese colleague maintained that the demonstration lesson should be a kind of 'show', that is, completely different from usual lessons. Therefore her Japanese colleague insisted that the lesson should be rehearsed before the demonstration. In this way it took a long time before they came to a compromise. The 'show' was successful according to her view. She hoped, therefore, that her colleague would change his way of teaching, adopting her view of teaching. However nothing changed to her disappointment.